

第1章 二つの未来図

第一に人間を脅威にさらすのは、テクノロジイという潜在的な死の機械装置ではない。実際の脅威は常に人間の本質にあった。人を枠にはめようとするルールこそが脅威なのだ。これによって、本来の啓示に気づけず、さらに原始的眞実を経験できなくなるかもしれないのだから。

マルティン・ハイデッガー『技術への問い』①

未来を暗示した二冊の本

私が生まれたのは一九五二年のこと、アメリカはベビーブームのまった中だった。二〇世紀半ばに大人になった私のような人間にとって、未来の恐るべき可能性は、二冊の本の中にあつた——ジョージ・オーウェルの『一九八四年』（一九四九年発表）と、オルダス・ハックスリーの『素晴らしき新世界』（一九三二年発表）である。

この二冊は、二つのテクノロジーを中心として展開しており、当時の誰よりも正確に先を見ていた。実際にこのテクノロジはそれから二世代にわたって登場し、世界を形作ってきた。『一九八四年』は、今でいう情報テクノロジー（IT）をテーマとしている。オセアニアという広大な全体主義帝国の繁栄は、テレスクリーンという装置に支えられていた。これは壁の大きさのパネル状画面で、個々の家の様子から、街角で人々を見守るビッグブラザー（訳注…独裁者）まで、画像を同時に送受信できる。テレスクリーンのおかげで、社会生活は真理省と愛情省による中央集権下に置かれることとなった。大規模なネットワークを通じて言動は政府に逐一監視され、プライベートシーは一掃されたのだ。

対照的に、『素晴らしき新世界』に書かれているのは、進行しつつあるもう一つの大きなテクノロジー革命、つまりバイオテクノロジー革命である。子宮の中でなく（今なら、たとえば試験管内だろう）卵子を人工孵化するボカノフスキー法、服用すればたちまち幸福になるソーマ、埋め込んだ電極で感覚が刺激されるフィーリ（触感映画）。さらに不断のサブプリミナルな反復を通じて、あるいはそれが働かないときはさまざまな人工ホルモンの管理を通じて、行動が修正されていく。こうした道具立てが、小説に不気味な空気を醸し出している。

この二冊の出版から、少なくとも半世紀たった今考えると、テクノロジの予言は驚くほど正確だったものの、『一九八四年』の政治に関する予言は的外れだった。一九八四年という年を迎え、そして送ったが、合衆国はまだソヴィエト連邦との冷戦に閉じ込められていた。この年、IBMの新型パソコンが導入され、やがてPC革命につながる。ピーター・フーバーが論じたように、パソコンはインターネットと結びついて、オーウェルの描いたテレスクリーンは実現したといえる。²しかし中央集権と専制政治の道具とはならず、逆に、パソコンによって誰でも情報にアクセスでき、政治が脱

中央集権化した。ビッグブラザーが各人を監視するのではなく、人々のほうがパソコンとインターネットを使ってビッグブラザーを監視できる。どの国の政府も、政治動向について多くの情報を発表するように求められている。

一九八四年からちょうど五年、以前なら政治SFだと思えたような劇的事件が続いて、ソヴィエト連邦とその帝国は崩壊した。オーウェルが鮮やかに示してみせた全体主義の脅威は消えたのだ。二つの出来事——一つは全体主義帝国が崩壊したこと、もう一つは、テレビ、ラジオからファクス、メールまで、安価な情報テクノロジートともに、パソコンが登場したこと——は、無関係でなかった。全体主義による支配は、政権が情報を独占し続けられるかどうかで決まる。現代の情報テクノロジによってそれが不可能になった以上、政権の力は弱まらざるをえない。

「人間」の根拠とは何か

もう一方の『素晴らしき新世界』で示される政治的予言は、今日も実現しつつある。そこに描かれるテクノロジ——試験管受精、代理母、向精神薬、遺伝子工学を用いた出産など——は、ほとんどが既に存在し、あるいは視野に入ろうとしている。しかし、この革命はまだ緒に就いたばかりだ。二〇〇〇年にヒトゲノム計画が完成したように、生物医学テクノロジにおいて、飛躍的進歩や成功が次々と発表され、この先、はるかに重大な変化が起こるだろうと予感させる。

二冊の本はそれぞれ悪夢を見せてくれるが、私にとっては、『素晴らしき新世界』のほうが、いつ読んでもよく練られた感じがして、刺激を覚えた。『一九八四年』の世界の間違い探しは、難しくない。主人公ウインストン・スミスは、何よりねずみ嫌いで知られている。そこで彼に恋人を裏切らせ

ようと、ビッグ・ブラザーは、ケージの中でねずみが顔に噛みつく仕掛けを作るのだが、これはいかにも古典的専制政治の世界ではないか。テクノロジの差こそあれ、人間の歴史でも同様のことは既に起こってきた。

他方、『素晴らしき新世界』では傷つく人がいないから、悪の部分がかれほど明白ではない。実際、誰もが自分の欲するものを手に入れる。登場人物の一人が言うように、「支配者は、暴力が善でないことに気がつき」、人々は強制的にとりよりも誘惑されたように、管理社会で生活せざるをえない。この世界では、病氣と社会的葛藤が排除され、鬱も狂気も、孤独も、情緒的苦悩もない。セックスは善であり、いつでもできる。政府には、欲求を感じてから満たされるまで、最低限の時間ですむように保証する省庁までが設置されている。もはや宗教を真剣に考えるものもなく、内省的に思索したり、報われない願いを持つものもない。生物学的家族は排斥され、誰もシェイクスピアを読もうとしない。しかし幸福で健康だから、(この小説の主人公、野蛮人ジョンを除き)誰もこうしたものがなくなつたことを悲しまない。

本小説の発表以来、各高校では、「ここに描かれる未来図のどこがいけないのか」という問題でエッセイを書かせてきた。数百万にのぼるエッセイのうち、ともかく「A」がもらえる答えは、通例このようなものだ。『素晴らしき新世界』に出てくる人々は健康で幸せかもしれないが、もはや「人間」でない。闘わないし、野心を持たない、愛さない、痛みを感じない、困難な道徳的決断をしない、家族を持たない、伝統的に人間がするものとされてきたことを行わない。人間の尊厳となる特徴を持たない。実際、もはや人類のようなものは存在しない。支配者によって養育され、アルファ、ベータ、エプシロン、ガンマという階級に分化されるが、これは人間と動物の違いと同じくらい、それぞれが

全く別ものなのだ。「人間本来の性質」が変えられてしまったこの世界は、深い意味で不自然である。生命倫理学者レオン・キヤスの言葉でいえば、「病氣や奴隷制によって劣悪な状態に置かれた人間とは違い、『素晴らしき新世界』風に非人間化された人々は惨めではない。自分が非人間化されていることを知らないのだから。もしも知っていても、気にしないだろう。彼らは実際に、奴隷にふさわしい幸福を与えられて幸せな奴隷なのだ」。(3)

しかしこの種の答えは、典型的な高校の国語教師を満足させるにはちようどいいが、(キヤスが続けて記しているように)十分とはいえない。というのは、さらにこんな質問が引き出されるだろう。ハックスリーが定義するような意味で「人間である」うえで重要なことは、何か？ 結局のところ、今日ある人類は、何百万年か前に始まり、この先も運がよければずっと続いていくと思われる進化のプロセスの産物である。人間の特徴として固定しているものといえば、自分がなりたいたいものを選び、その欲求に合わせて自らを修正していく全般的な能力だけだ。だから、人間であること、尊厳を持つことが一連の情緒反応と直結しているとはいえないはずだ。情緒反応は進化の歴史の副産物にすぎないのだから。生物学的家族というようなものはないし、人間性あるいは「正常な」人間というものもない。もしあったとしても、それが、正しいこと、正義であることを決める指針となる必要はないだろう。ハックスリーが語っているのは、こんなことだ——前から人間がずっと悲しみを感じたり、絶望や孤独にうちひしがれたり、病氣に苦しんだりするのは、種としてこれまでできてきたからにすぎない、と。こんな演説をしたら議員には選ばれそうにない。これが「人間の尊厳」の基盤である、と主張するのをやめて、人間は自ら修正するようにできていると考えようではないか。

ハックスリーは、人間であることの意味を定義するよりどころは宗教ではないか、と示唆している。

『素晴らしき新世界』において、宗教は排斥され、キリスト教は遠い過去の記憶にすぎない。キリスト教の伝統では、人間は神の形に作られ、これが人間の尊厳の根柢となっている。バイオテクノロジーを用いて（キリスト教作家、C・S・ルイスのいう）「人間の廃止」にかかわることは、神の意志に反する。しかし、ハックスリーやルイスを丁寧ニに読むと、宗教が「人間である意味」を理解しうる唯一の根柢と想っているとは考えられない。両者とも、正邪、正義と不正、重要と不要の定義においては、特に人間の本質が特殊な役割を果たす、と述べている。ハックスリーの『素晴らしき新世界』のどこがおかしいかは、人間の本質が価値観の源としてきわめて重要である、という見解に当てはまるか否かによる。

悪魔の取引

本書の目的は、ハックスリーが正しいと論じること、現代バイオテクノロジーが重要な脅威となるのは、それが人間の性質を変え、我々が歴史上「人間後」ホストヒューマンの段階に入るかもしれないからだ、と論じることである。これが重要なのは、人間本来の性質なるものが存在し、しかも意味ある概念として存在し、そのおかげで種としての我々の経験が安定的に続いてきたからである。これが宗教と組み合わせることで、最も基本的な価値観を決める。政治体制の種類を形作り、制限するのは人間の性質である。だから、我々の現在を変えるほど強力なテクノロジは、リベラル民主主義と政治の性質そのものにおそらくよからぬ影響を与えるに違いない。

『一九八四年』のところで考えたように、結局のところ、バイオテクノロジーがもたらす結果は、完全に意外なほど良善であり、くよくよ心配することはなさそうだ。テクノロジーは見かけほど力があ

るとは思えないし、我々は節度を守り、慎重に應用するだろう。しかし、私あまり自信がないのは、他の科学的進歩と違い、バイオテクノロジーは、明らかなプラスと微妙なマイナスが切れ目なく混じり合っているからだ。

核兵器と核エネルギーは、初めから危険なものともみなされている。それゆえに、一九四五年マンハッタン計画によって初めて原子爆弾が製造された時から、厳格な規制を受けてきた。ビル・ジョイらが心配するのは、ナノテクノロジー、つまり分子規模で自己再生するテクノロジーであり、そのうちに制御できなくなり、創造者を破壊しかねないことだ。(4)ところが、この種の脅威は見てすぐわかるだけに、実は取り組みやすい。自分が作った機械に殺されるかもしれないならば、自衛手段を取ればいい。これまでも、我々は現に機械を支配してきたではないか。

バイオテクノロジーの産物には、同じように、人類に明白な危険を示すものもある——たとえば、スーパーバグ(訳注:複数の遺伝子から作り出した細菌で石油を大量に消費する)、新ウイルス、毒性反応をもたらす遺伝子組み換え食品など。核兵器やナノテクノロジーのように、これもある意味で扱いやすい。危険とわかれば、明白な脅威として用心できるからだ。他方、バイオテクノロジーによる典型的な脅威は、ハックスリーの小説に見事に描かれている。トム・ウルフの『悪いね、君の魂は死んだんだ』という小説のタイトルにも要約される。(5)医学的テクノロジーは、多くの場合、悪魔の取引を持ちかける。たとえば、長生きはできるが知能は低下する、とか、鬱からは解放されるが創造性や精神性が失われる、とか。自分の力でできることと、脳内化学物質のおかげでできることの区別がつかなくなるセラピーもある。

三つのシナリオ

次に三つのシナリオを挙げてみる。これらの可能性は、次の世代、あるいはその次の世代には明らかになるだろう。

まず第一のシナリオは、薬物に関連する。神経薬理学が進歩した結果、心理学者は、人間の性格が以前信じられていたよりもはるかに柔軟であることを発見している。プロザックやリタリンのような向精神薬は、自尊心や集中力などに影響しうる一方、望まない副作用を多く生み出しやすいことがわかっており、そのために、明確な治療的必要性がない限り使用を控えられている。しかし将来は、ゲノムの知識を利用して、製薬会社が個々の患者の遺伝的プロフィールにふさわしい薬をオーダーメイドで調合し、副作用を最小限に抑えることもできる。無感情な人々は快活になり、内省的な人は外向的になる。水曜日と週末では、違う人格にもなれる。憂鬱になったり悲しくなったりする理由は、もはや存在しない。もともと「正常に」幸せな人も、もっと幸せになれる。中毒や二日酔い、あるいは長期にわたる脳障害の心配もなくなる。

第二のシナリオでは、幹細胞研究の進歩のおかげで、身体のはほぼ全組織が再生できる。その結果、平均寿命が百歳以上に押し上げられるだろう。新しい心臓や肝臓が必要になったら、豚や牛の胸の空洞内部で育てればいい。アルツハイマーや打撃による脳障害は回復できる。唯一問題となるのは、人間の老化について、バイオテクノロジー産業では解決の方法がない微妙な面が（それほど微妙でない面も）少なくないことだ。人は年をとるにつれて頭も固くなり、自分の考えに固執するようになる。どんなに努力しても性的魅力は薄れていくし、生殖可能な年齢のパートナーをいつまでも求めていられない。最も悪いのは、子どもの邪魔にならないどころか、孫やひ孫に道を譲ろうとすらしないことだ。しか

し反面、子どもを産んだり伝統的な形で生殖したりする人がきわめて少なくなるので、これはほとんど問題にならないかもしれない。

第三のシナリオでは、金持ちが着床前の胚をふるいにかけて、最も理想的な子どもをつくるのが日常茶飯事になる。子どもの容貌や知性を見れば階級や育ちがわかる。階級につきあわない場合は、自分のせいでなく親の遺伝的選択を責めればよい。人間の遺伝子は、研究目的で、また医薬品開発目的で、動物や植物にさえ移植されている。動物の遺伝子が人間の胚に移植されて、身体の耐久性や病気に対する抵抗力を高める。科学者たちに、人間と猿が半々の実物大キメラを作る意図がないとしても、しかし、それは不可能ではないのだ。子どもたちは、クラスに自分よりはるかに劣る子がいれば、遺伝的に見て完全な人間でないのではないか、と思い始めるだろう。そして実際、そうでないのだ。

悪いね、きみの魂は死んだんだ：

臨終近く、トマス・ジェファソンはこう書いている。「科学の光はあまねく広がり、疑いのような真実があらゆる人々の目に明白になった。つまり、人類は生まれながらに貴賤が定められているわけではないということだ」。(6) 独立宣言に記された政治的平等は、人間が本来的に平等に作られているという経験的事実に拠っている。個々人で、また文化によって大きく違いがあるとはいえ、人間性は共通しているから、あらゆる人間が地球上の誰とでも意思を伝え合い、道徳的関係を結ぶことができるはずだ。バイオテクノロジーによってもたらされる究極の問題とは、こういうことだ。——実際に、肉体労働をさせられる人と、させる人を産み分けできるようになったら、政治的権利はどうなるだろうか。

明白な答えと泥沼の議論

バイオテクノロジーは、将来大きな利益をもたらす可能性がある反面で、物理的に見えやすい脅威、あるいは精神的で見えにくい脅威を伴う。これに対して、我々はどうすべきなのか。答えは明白である——国家の権力を用いて、それを規制すべきだ。もしも個々の国家権力で十分でないならば、国際的基盤で規制することが必要である。バイオテクノロジー使用の善悪を見極める制度を作り、国家的、国際的両面で有効に施行する方法について、今こそ具体的に検討を始めるべきだ。

今述べたのは明白な答えなのだが、しかし現在バイオテクノロジーをめぐる多数の論客にとつては、明らかでないようだ。あいかわらず、議論は、クローンや幹細胞研究などの倫理性について、どちらかというと抽象的な泥沼に陥っている。そして何でもOKにしたい陣営と、研究と実践を広く禁止したい陣営の二手に分裂してしまった。より幅広い議論はもちろん重要であるが、事態は非常に速く進んでいるのだから、テクノロジーに支配されるのではなく、人間が支配し続けるために、将来の発展をどう方向づけるべきか、すぐにでも、より実指的な指針を出すべきだ。何もかも認めてしまうことのないし、かなり期待できる研究まで禁止する必要もないと思われるから、妥協点を見つけることが求められる。

新たな規制の制定は多大な労力を要するものであり、簡単に取り組める問題ではない。この三〇年、各国では、航空業界から電気通信業界まで経済の大部分で規制を緩和し、政府の規模・権限の縮小に向けて動いてきた。その結果生まれた国際規模の経済は、はるかに効率よく富を生み出し、技術革新を実現している。過去の経験から、あらゆる形での国家介入に対して本能的に敵意を持つ人は多い。ヒト・バイオテクノロジーを政治的にコントロールする際に、主要な障害となると思われるのは、こ